民族混血の研究

篠崎信男

一、序論

本論に於いて民族混血の研究と題したのは生物學的概念に於ける人種の混血に關するものが主たる內容である。卽ち人種なる概念は遺傳特質、竝びにその識徵の共同負荷體として根柢に把握せられるものであるが、斯かる遺傳負荷體は各地域によりて夫々外界の影響を受け變態せしめられつゝ、現在、各民族に存在してゐるものである。而して之が分類方法の規定は人類遺傳學的諸識徵の決定と共に專ら肉體的に取扱はれ、世界人類分布狀態の分類が諸學者によりて試みられてゐるものである。卽ち古くはベルニエル(一六二五—一六八八)リンネ(一七〇七—一七七八)ブールメンバツハ(一七五二—一八四〇)等を擧げ得らる可く、更に又ハツクスレー、デニケル、ケルヂー、ブリントン、キューヴィエ、ハンキンス、カムペル、トピナール、ディクソン、フィツシャー等の分類法をも述べ得られるものである。而して此等分類は何れも學術的方途の下に、科學的に夫々若干の人種識徵によりて爲されたるものであるが、猶今後の研究によりては更に別途の新分類法をも案出し得るであらう。而して民族を研究するに當り、此等民族が過去數世紀間に如何なる過程を經て、現今の狀態に至りたるものか詳かならざる時、混血人種と稱せられたるもの及び混血研究より民族なる實態を探究するも有意義ならんと思惟するものである。事實ハツクスレイ等は世界に於いては人種混淆の範圍、極めて廣く、從つて純粹人種なるものは存在せずとまで極言し、又ローデンバルトは世界に於ける純粹種族と言はれるKreoleなるものは御伽噺であると言つてゐるのを見ても、混血研究の重要性は理解出來るであらう。故に現在混血者に特有なる呼稱のあるものがある。卽ち周知なるものを述べれば

○ムラツト(Muratten)白人と黑人の混血者
○テルツェロン(Terzeron)白人とムラツトの混血者
○クオテロン(Quateron)白人とテルツェロンの混血者
○オクタヴオン(Oktavon)白人とクオテロンの混血者
○メステイソ(Mestizen)白人とインディアンの混血者
○ショロ(Cholo)白人とインディアンの混血者(南米にて)
○ザンボー(Zambo)黑人とインディアンの混血者
○カフーソ(Kafuso)黑人とインディアンの混血者
○リプラプ(Lip-Lap)白人とジャバ人の混血者
○ユーラシヤ人(Eurasier)白人と印度人の混血者

である。斯くの如く混血者に特有の呼稱が與へられるまでの道程を考慮せば、斯る混血問題は、その人口上、社會學的に、又植民政策問題として、民族問題にまで到る重大なる對象たる事は、容易に想像し得る事であらう。

以上の呼稱は、大半、白人と他人種の混血者に多いが、更に此等以外の混血者をも世界各地に存在してゐる事は勿論である。現今は交通が便利になつた爲、各民族の交流は不可避的にして、之が各地に於いて混血しないまでも、數多く異人種の混在してゐる事實は見られるものである。特にアメリカに於いて、最も甚しき事は、前述呼稱せる混血者、主にアメリカに多き、實情に徵しても明らかである。以下諸外國に於ける異民族混在狀

態を見るに次の如き數値が見られるのである。

○南　米(Harris (1922)に依る)

白人……一四、〇〇〇、〇〇〇乃至一五、〇〇〇、〇〇〇人

ペルー(五〇〇、〇〇〇人)

ボリビヤ(二六〇、〇〇〇人)

インディアン……八、〇〇〇、〇〇〇乃至九、〇〇〇、〇〇〇人

ペルー(二、〇〇〇、〇〇〇人)

黑人……二、〇〇〇、〇〇〇人

又此等混血者も必然的に多く次の如くである。

メスティソ……一三、〇〇〇、〇〇〇人

ペルー(一、五〇〇、〇〇〇人)

ムラツト……六、〇〇〇、〇〇〇人(主にブラジル)

ザンボー……三〇〇、〇〇〇人

○北米合衆國(Woodson (1918) Fehlinger (1912) Hoffmann (1923) に依る)

白人(一八五〇)……四三四、四五四人

〃　(一八六〇)……四八八、〇七〇人

黑人(一八五〇)……三、六二三、二〇〇人(ボストン)

〃　(一八六〇)……四、四五七、六〇〇人(〃　　)

〃　(一八七〇)……四、八六六、七〇〇人(〃　　)

〃　(一八九〇)……七、四四八、〇〇〇人(〃　　)

〃　(一九二三)……七、七七七、〇七七人

これと平行して混血者の數も增加してゐる。

ムラツト(一八五〇)……四〇五、八〇〇人(ボストン)

ムラツト(一八六〇)……五八八、四〇〇人(ボストン)

〃　(一八七〇)……五八四、〇〇〇人(〃　　)

〃　(一八九〇)……一、一三二、一〇〇人(〃　　)

〃　(一九二三)……二、〇四九、六八六人

○ハワイ島(Fehlinger(1912)、Hoffmann (1923)、Territorial Bureau の人口動態統計(1932—1936)に依る)

純粹ハワイ人(一八七二)……五六、八九七人

〃　(一八七八)……五七、九八三人

〃　(一八八四)……四〇、〇一四人

〃　(一八九〇)……三四、四三六人

〃　(一八九六)……三一、〇一九人

然るに一九三〇年の民族混在狀態は次の如くである。

純粹ハワイ人……二二、六三六人

混血ハワイ人……二八、二二四人

ポルトガル人……二七、五八八人

スペイン人……一、二一九人

カウカス人……二四、三五八人

支那人……二七、一七九人

日本人……一三九、六三一人

朝鮮人……六、四六一人

フイリピン人……六三、〇五二人

黑　人……五六三人

此等人口中には混血者をも含んでゐるもので混血種として次の如き數値がある。

ハワイ人(混血種)……九、七八〇人
混血ハワイ人……二八、二二四人
カウカス人(混血種)……五、八四二人
支那人(〃　)……四三〇人
日本人(〃　)……五〇〇人
朝鮮人(〃　)……一六〇人
フイリピン人(〃　)……一、三七五人

然るに一九三二年より一九三六年の四ケ年にハワイに於いて、生れた子供の中、混血者と非混血者の數値は次の如く、混血者の出生數が多い事を示してゐる。

ハワイ人(混血兒)……七、五五四人(非混血兒)……一、三六九人
カウカス人(〃　)……五、七六二人(〃　)……六、二六〇人
支那人(〃　)……三、八一九人(〃　)……一、九六三人
日本人(〃　)……九六二人(〃　)……一四、七九八人
朝鮮人(〃　)……一九七人(〃　)……四一三人
フイリピン人(〃　)……一、四六七人(〃　)……四、五一六人

○濠洲及びその附近の南洋諸島(Melville. J Herskovits (1941) Waller (1940)に依る)

白人(主に英人)……六、六〇〇、〇〇〇人
支那人(その他アジア生れのもの)……一二二、〇〇〇人
パプア人……二七五、〇〇〇人
フィジー人……八四、〇〇〇人
オーストラリヤ土人……六二、〇〇〇人
マオリス人……六三、〇〇〇人

而してパプア人とフィジー人との間には、明らかに混血が生じてゐると言はれ、白人には混血が顯著に見えないが、これは白人が法律的、社會的に他人種を閉出した爲と言はれてゐる。

○カナダ(K. L. Little(1941)に依る)

白人(主に英人フランス人)……約一〇、〇〇〇、〇〇〇人
インディアン及びエスキモー……一二八、〇〇〇人
アジア人(主に支那人)……七〇、〇〇〇人
黑人……二〇、〇〇〇人

北米合衆國及び南米に於ける如く、カナダに於いては、白人と他人種との混血は、社會的原因の爲、顯著でないが、土着インディアン及びエスキモーは既に強度に白人と混血してゐると言はれる。

○南アフリカ(K. L. Little(1941)に依る)

白人(主に英人和蘭人)……二、〇〇〇、〇〇〇人
バンツウ人……六、六〇〇、〇〇〇人
インディアン……二二〇、〇〇〇人
混血有色人……七七〇、〇〇〇人

即ち此處に述べた、混血有色人(Mixed "Cape Coloured")なるものは、ホッテントット人、ブッシュマン人、バンツウ人、マライ人(ジャバ人、シヤム人等)の混血に始り、後、相當なヨーロッパ人の血が交り、外形支那人的樣態を有し、社會的には白人と黑人との人種的緩衝層の役割を演じ、白人と黑人竝びにバンツウ人との間は完全に隔離せられてゐるが、混血有色人と貧困なる白人との間には、連續的に混血が行はれてゐると言はれる。

○西印度諸島(K. L. Little (1941) に依る)

白人(凡て英人)……一三〇、〇〇〇人
混血有色種……一、六〇〇、〇〇〇人

此處で土着印度人の血は無視せらる可きではないが、本混血有色種の人口中、その五分の四は黑人にその源を發し、斯かる人口は白人移住者と、その奴隷との間に、かなりの混血が過去に於いてなされた結果發生したものであると言ふ。然し現在は相當、强度の隔離狀態にあるものである。

○英國(英國及び Wales の國勢調査(1931)に依る)

ヨーロッパ大陸生れの白人……二二六、〇〇〇人
アジア人……一一、三〇〇人
アフリカ人(主にエヂプト人)……六、二〇〇人
アメリカ大陸生れのもの(アメリカ人を除く)……一一、〇〇〇人

而して、ロンドン、リバプール、カルディーフその他の港市に於いては、英國居住の者の間には、相當の混血が行はれてをり、特に西アフリカ人及び東インド諸島人の船員間には、可成りの混血がなされてゐると言はれる。

○ヨーロッパ大陸(K. A. Wieth-Knudsen(1938) Lange に依る)

ヨーロッパ大陸に於いては、人口の移動甚しく、以上の如き數値はないが、南部地方に於いては、フランスの人類學者 Lapouge 及び Poitires 等に依り、混血の人口問題に關する研究が行はれ、現今フランスの住民は少くとも二種の混血より成るものとし、英人(ゴール人)ヤンキー人、オランダ人、スカンヂナビヤ人等の如き性格を有する L'Homo Europaens とアルプス人、南アルメニア人、ポーランド人、バルカン人、小亞細亞人等の如き L'Homo Alpinus の混合より成つたものであると報じてゐる。又北部地方のドイツに於いても、現代ドイツ人は、ローマ人、フン族、アラビヤ人、アヴァール人、マヂャール人、蒙古人等の血を交へ、更にトルコ人、猶太人、スラブ族等と混血し、又アフリカの黑人の如き血も入つてゐると言はれる。グレントロップに依れば獨領アフリカ植民地では一八九二年には、混血家族は白人家族の約半數なるを報じてゐる。併し、現今ドイツは、ナチス政權確立後、民族純血政策を取り、就中ユダヤ混血兒の增加を抑制す可き對策が講ぜられ、一九三五年九月十五日「國民血統保護法」公布せられるに及んで、ドイツ人とユダヤ人の結婚乃至私通も禁ぜられるに到つたのである。

以上概略、諸外國に於ける民族の混在狀態を述べたものであるが、斯る混在の起く處、必然的に、更に混血現象を惹起するものである。又、既述せる混血種以外に世界に於いては、混血種と稱せられるものは少くなく、これが研究も、夫々の方途によりて爲さる可きは至當な事と言はねばならない。

特に人類遺傳學的研究には不可缺のもので、更に、民族政策問題、又社會的問題として、廣汎なる研究分野を包含する事は、贅言するまでもない事である。予は本稿に於いては、專ら、生物學的觀點より、以下論述せんとするものである。

二、混血研究調査概論

予は、曩に人類學雜誌第五十八卷、第五號に「南洋群島人と歐羅巴人其他との混血家系調査豫報」と題して、これが概略を發表したのであるが、更に補正細論し、以て研究せんとするものである、而して之が論表に當り、先づ世界に於いて、如何なる學者に依りて混血の研究が爲されて來たか、又は調査、及び、意見等が報告せられてゐるかに付き、予の入手せるものに基いて、之を通覽するのも意義のない事ではないと思惟し、混血研究史とも言ふ可き總論を簡單に以下略述する次第である。然し嚴密に言へば以下

諸學者の混血研究は何れも一貫共通的のものに乏しく、特に、我が國に於いては、その感を強くするものであるが、斯學に對する研究者も漸次に將來は增す事を期待しつゝ以下摘述する次第である。

○Long (1774)　○Berenger (1779)

白人と黑人の混血者に關し、その出產率の低い事を報告してゐる。

○Paul Broca (1859)

人種の混血研究に關して、科學的計畫を立て、フランスの人類學會に提案したが實現しなかつたと言はれる。

○Russ (1860)　○Périer (1866)

白人と黑人の混血は出產力の低下を來す事を報告してゐる。

○E. Baelz (1880—1884)

混血兒の研究を行ひ、特に小兒斑(蒙古斑)及び皮膚色調、目の形等の人類學的調査を行ひ、又日本人は、アイヌ、滿洲朝鮮型、マレー型モンゴリア族等の混血種なりとしてゐる。

○R. Neuhaus (1885)

ハワイ島に於ける支那人とカナカ土人の混血を調査し、傾斜せる眼裂は優性であると報告した。

○Nordenskiöld (1886)

エスキモーとヨーロッパ人の混血者を調査研究し、眼裂の狀態、鼻形等を研究し、鼻の凹型なるものは劣性であると言つてゐる。

○F. Boas (1894) (1895)

印度人とフランス人との混血を調査、身長、頭幅、顏面幅等の增大せるを報告、更に發育の早期には、遲滯せる生長が、春期發動によつて速度を增加すると發表してゐる。

○Reibmayer (1897)

英國人とポリネシア人、又レホボーテルの混血種に關し、その出產力の高い事を報告した。

○印度マドラス博物館出版雜誌第二卷第一冊(1899)支那人とタミール人(Tamil Pariah)の混血者を印度ニルギリ地方で調査、躍進現象(luxurieren)を報告、母のタミール黑色皮膚調より、父の薄褐色調に似るとの報告がある。

○B. Hagen (1899) (1906) (1907)

マレー人とメラネシア人、又インディアンと黑人の混血を研究、頭蓋幅、顏面の長さの增大を報じ、細い目、剛直毛、黑髮は優性遺傳と見做してゐる。又インディアンの混血種及びエスキモーの混血種は出產力の低い事を報告した。

○C. Davenport (1907) (1913) (1917) (1928) (1929) (1939)

ジャマイカに於ける白人と黑人の混血者を調査、體軀の大いさが兩親より大なる事を報告、目、毛髮、皮膚の色調等に關し、メンデル式遺傳を研究し、又全上肢長と身長の指數、鼻幅、骨盤幅等の研究を行ひムラツトの中間型を示し混血者の調和型として報告してゐるが、又アメリカに於ける混血種に關し、齒及び顎等の不調和を報告、特に齒槽と齒の關係に就いての不調和性を示し、廣く躍進現象、又貧化現象(pauperieren)を說明してゐる。更に黑人とドイツ人の混血について心理學的遺傳研究をも行ひ、彼は混血の遺傳に於いては突然變異なる變化を想像し得る事を發表した。

○Holdge (1907—1910)

インディアンとエスキモーの混血種に就いて調査研究し、その出産力の小なる事を報告してゐる。

○Tillinghast (1907—1910) (1913)

黑人と中歐人の混血は北歐人より出産力小なる事を報告し、南北戰爭に於いて、ムラツトは純粹民族よりも作業能力及び出血、疾病に對する抵抗力の劣る事を示し、英人と黑人の混血者はスペイン人、又はポルトガル人と黑人の混血者よりも弱いと報じた。

○Chervin (1908)

黑人、ボリビヤ人、印度人の混血を調査研究し直型なる鼻形の優性なるを報告した。

○Hurst (1908)

ヨーロツパ人の混血種に就いて、眼、毛髮、皮膚等のメンデル式遺傳を研究してゐる。

○E. Fischer (1908—1927) (1930) (1939)

レホボーテル混血種、卽ち南アフリカ土人のブーア人とホツテントツト人との混血者を調査、調査人數は一、二二八人に及び家族數は二三家族で五代乃至六代に到つてゐるものである、故に叔父、甥、從兄弟等が三十餘組あるが、計測を行つたのは、男七四人女九〇人で純粹のホツテントツト人は男八人女七人であつた。卽ち男子身長の平均値は一六八糎、又混血度の比較的新しいものをEu群とし、一二人の平均身長は一七四糎(オランダ人一六七・五糎、ホツテントツト男一五七・九糎女一四三—一五五糎)で所謂、躍進現象を報告、又出産力は高く平均七・七と言ふ數値を示し、出産率低下を來さぬ事を發表、その他マレー人と印度人、支那人とマレ人、印度人とヨーロツパ人、ヨーロツパ人とホツテントツト人の混血種に於いて、顏面の長くなる事を發表、又北歐人と南歐人、チゴイナー人、ラプランド人又はユダヤ人等の混血に於いても斯かる事實ある事を報告してゐる。又ホツテントツト人と白人の混血者に就いて、蒙古褶襞の遺傳關係はメンデル法則の劣性遺傳なるを發表し、白人とエスキモーの混血に就いても同樣なる事を報告、人類學的混血研究としては代表的なものである。

○坪井正五郎(1908)

「日本に於ける雜婚問題」と題し混血現象を論述、結論として、混血者に對する指導教育を强調してゐる。

○レーモンパール (1909)

南米のベーノスアイレス市に於ける十年間二十萬人の出産統計を基礎として、イタリヤ人、スペイン人、アルゼンチン人の同人種間の出産と、之等異人種間の混血者出産とを比較し、混血が前者に比し、著しく男子の出産數が多い事を報告した。

○R. B. Bean (1911)

支那人とタガログ人、黑人とフイリピン人の混血家族を調査、支那人の剛毛はフイリピン人の波狀毛、縮毛に關して優性なる事を報告し、又マレー人と黑人の混血者を研究し縮毛の劣性なるを見出したと報告してゐる。

○Salamann (1911)

ユダヤ人と他人種の混血を調査、眼の狀態、鼻形狀態を全體的に觀察研究し、此等諸表徵は全型として觀察するの利あるを說いてゐる。

○A. E. Jenks (1911)

「黑人問題に關する若干の見解」と題し、黑人男子と白人(六五%以

上は合衆國以外のチュートン族の小女)の混血は合法的なるものとして、二十二州に廣く行はれてゐるが、非合法のものとしては、白人男子と黑人女子の混血で地方によつては、出生兒の二%以上はこの混血兒である事を報じてゐる。

○Crellitze 1912)

南ドイツに於いて長頭型と短頭型の混血種を調査、眼の障碍が長頭人種の純粹に見出さるゝ場所に比して二倍に達すると言ふ。

○Hoffmann (1912) (1923)

北アメリカに於ける混血人口を論じ、合衆國では南部地方人口千に付二五二人、北部地方では三六三人、西部地方では四七三人までは黑人と白人の混血者であると言ふ又ハワイに於ける混血者の結核に就いても調査し、純粹民族よりも結核死亡の多い事を報告してゐるハワイの混血結婚を調査し、混婚數二〇、六二二で、その分布狀態に關し次の百分率を掲げてゐる。

日本男子と他人種の女……1.0±0.037%

フイリピン男子と他人種の女……2.5±1.5%

スペイン男子と他人種の女……4.9±3.3%

ポルトガル男子と他人種の女……14.2±2.6%

支那人男子と他人種の女……31.7±3.0%

○Fehlinger (1912)

アラスカのエスキモーとロシア人の混血を報告、混血者はヨーロッパ的傾向を示さず稀には淡調な虹彩色調を示すエスキモーとヨーロッパ人の混血兒が居るけれども毛髮は暗調で「ひげ」は純粹のエスキモーよりも濃調でないと報告してゐる。又北米ボストンに於て、一九〇〇—一九〇四年に一四三組の混血夫婦中、一三三組は黑人と白人の混血組であつたと報じてゐる。

○Engerrad (1912)

支那人男子とメキシコ婦人の混血を調査黑色毛は優性らしいと報じその黑色化を注意してゐる。

○Stefanson (1913)

エスキモーの混血狀態を調査した。

○森　丑之助(1914)

生蕃土人と支那人の混血を報告、タイヤル族と支那人の混血者は同化して、生蕃人的であり、カンタバン部族にはブヌン族とタイヤル族の混血があり、東埔社、及び勃仔社にはツオウ族とブヌン族の混血あるを報告、卑南蕃は殆んどパイワン族とアミ族の混血であると言ふ。又日本人とパイワン族及びアミ族の混血者も若干あると報告した。

○Sapper (1914)

中部アメリカ地方の混血を調査、インディアンと白人の混血は南部地方には相當數あつたが北部地方には極めて少いと報告した。

○Tozzer (1916—1920)

ハワイに於いて、ハワイ人と支那人の混血を二度調査し、五〇八人を研究、混血第一代目は短頭で、直毛は優性であると發表してゐる。

○L. R. Sullivan (1916—1920)

數千人のハワイ人を調査せるも、死後はC. Wissler が引き繼ぎ整理中であると。

○　A. G. Janks (1916)

印度人と白人の混血を調査、皮膚、毛髮、虹彩色、毛型、被毛狀態

頭幅、顏面幅は中間型の遺傳樣式を取ると言ふ。

○Grentrup (1916—1920)

獨領アフリカ植民地に於いて、混血狀態を調査、白人家族の四五%は混血家族であつたと言ふ。

○H. L. Shapiro (1916—1920)

イギリス人とポリネシヤ人の混血調査を行ひ、過去に於いては六人の英人と六人のタヒチ島人の混血に始り、ノーフオルク島に四〇〇人、この中ピトカリアン島に一七五人歸り住んでゐると云ふ。之を一五〇人調査し躍進現象を報告してゐる。

○Ales Hrdlicka (1918)

アメリカ、オクラホマ州に於けるシオーニー族、キカプー族の混血を調査し、人口統計八〇〇人中、純血は三名で何れも老人であつたと報じ、混血の甚しい事を論じてゐる。又北極地方のアレウト族はエスキモー系統の一部族としてアサパスカン族(平均頭形指數八四)と混血したものの如く、ユカギール族はツングース族と混血してゐるのでアメリカノイドとしての識徴よりも、モンゴロイドとしての識徴に近い體性を示し、ツングース族は滿洲より北極洋、オーツク海よりエニセイ河東部流域にまで全東部シベリアに分布して居ると言ひ、少群はタヅ河流域のサモエヅド族間、及びカス河のエニセイ、オスチヤクにも居住してゐると言ふ。而して朝鮮はツングース族と支那人の混血人種であらうと發表してゐる。

○Woodson (1918)

北アメリカに於ける混血狀態を調査し、白人とインディアンの混血者メステイソも相當多數居るが、白人と黑人の混血ムラツトは遙にこれより多數に昇る事を報告した。

○Mc Canghey (1919)

一九一三—一九一七年間に三八〇組のハワイに於ける混血結婚を調査、五四%はハワイ人と白人の混血で、白人は全人口の二七・一%(一九一〇年)、三八%はハワイ人と支那人の混血で、支那人は全人口の一一・三%であつたと言ふ。日本人とハワイ人の混血結婚は僅か八%で全人口に對する日本人は四一・五%を占めてゐると報告した。

○Lundborg (1921)

北歐人種と南歐人種との混血、又ジプシー族ラツプ族又はユダヤ人との混血を研究し身長增加、顏面延長の增大を報告した。

○Mjoeen (1921) (1923) (1929)

ラツプ族とスウエーデン人、ノルウエー人等の混血者を研究、身體の弱劣なるを報告、又身長、顏面等の增大する躍進現象をも報告してゐる。又遺傳因子により內分泌腺の共同作用が惡く、斯かる混血者に於いては膵臟に關する因子の障碍に依り、糖尿病の生ずる事を言ひ、肺活量及び結核に對する抵抗力が兩親の系統より劣る事を示してゐると報告した。

○Bryn (1922)

ノルウエー人とラツプ族との混血を研究し、身長が小さい事を報告してゐる。

○Harris (1922)

インディアンと白人の混血狀態を調査し、南米に於いては混血第一代の者の人口は一、三〇〇萬人と報じ、白人は一、四〇〇萬乃至一、五〇〇萬人であるが、この中には混血第二代目のものも含まれてゐると

言つてゐる。

○Hooton (1923)

白人と黑人の混血者ムラットを調査研究し、毛髮の長く而も少量であるのは、黑人的毛髮の要素である事を論じてゐる。

○Siemens (1924)

黑人とインディアンの混血を研究し、インディアンの長き毛髮は優性なる事を報じてゐる。

○H. H. Keih (1924)

白人とハワイ人、支那人とハワイ人の混血を調査、諸識徵の遺傳法則を研究した。

○Scheidt (1925) (1929)

混血現象に於ける躍進現象は同義因子の新結合に基く爲とし、中央ヨーロッパ人の細長い顏貌は混血の結果であると發表した。

○C. S. Coon (1926)

モロッコの純血種、混血種の狀態を研究し一一四人を調査したが、專ら社會學的方途によりて之を研究してゐるものである。

○W. E. Castle (1926)

混血者の不調和性、寄木細工的容貌等を記載し、混血問題は單なる生物學的問題でなく社會的問題である事を論じてゐる。

○Landauer (1926) (1929)

白人と黑人、その他の混血者を研究し、單直毛の優性を報告した。

○H. Kidder (1926)

アルヂエリア、チユニジアで三〇〇人以上のチユニジアに於けるユダヤ人の混血を調査研究した。

○Dunn (1923) (1927) (1928)

ハワイに於いて混血調査を行ひ、ハワイ人と南支那人の混血者七五人、ハワイ人、支那人及び白人の三人種間の混血者二九人、日本人とハワイ人の混血者八人、その他、計一〇四人の混血者を調査研究し、身長等の計測値は遺傳的に中間型であつたが、ハワイ人の短頭、支那人の軀幹、頭幅、剛直毛、蒙古褶襞は優性を示したと報じてゐる。

○Marcuse (1927)

一九二三年、ドイツに於ける宗教的混淆を調査、生物學的研究ではなくて、所謂、社會宗教的問題として、キリスト教徒とユダヤ教徒の信仰上の混血結婚を研究、五八一、二七七組の夫婦中、二、〇〇四組の信仰的混血夫婦あるを報告してゐる。

○Larssen (1927) Godfrey (1927)

ハワイの混血者に關し、蒙古斑を調査研究し、七〇〇人以上の初生兒より十二歲に到る混血小兒を研究、これより蒙古斑の發現には二つの因子が作用するとの說を發表した。

○Flemming (1927)

支那人とイギリス人の混血者を研究し、支那人の皮膚及び虹彩色の暗調は優性である事を發表し、一人の子供には捲髮が見られ、觀察數四七・二%は支那人と同樣の毛髮を有し、若干のものは中間型を示した。子供の半數は支那人の廣平なる鼻と幅廣い厚唇を有し、頭型も半數は支那人の特徵を持ち、一五%は短頭八五%は著明な、長頭であつたと報告してゐる。

○Herskovits (1927)

白人と黑人の混血ムラットに對して、その變異性を研究した。卽ち

數學的觀點より變異係數を作成、以て夫々の混血度を計算してゐるものである。

○D. O. Williams (1927)

メキシコ、中央アメリカに於ける純血、混血を調査し、特にインディアン、黑人、白人の混血狀態を研究した。

○Lotsy (1927) (1928) ○Goddijn (1927) (1928)

南アフリカに於ける有色混血種(Cape-people)の研究を行ひ、特に毛髮色調に關する判別研究を行つた。又體軀の釣合、身長等を調査、兩親よりも屢〻大となり、或は小ともなる事を報告してゐる。

○Ernst Rodenwaldt (1927)

チモールのキザール島に於いて、オランダ人とインドネシア人の混血者に就いて、毛髮、その他につき、調査研究し、メンデル律の法則を確認せりと報じ、鼻形を廣く研究し、凹型なるものの優性、及び厚唇は薄唇に對して優性である事を論じ又顏面の延長等の如き躍進現象を報じてゐる。

○W. B. Cline (1927)

エヂプト人とアラビア人の混血者を調査研究した。

○Bijlmer (1928) (1929)

チモールの混血種を調査研究し眼及び上下唇の狀態を觀察したものである。

○Suk (1928)

エスキモーの混血種を調査し、その結核に對する抵抗力の弱い事を報じてゐる。

○Goldschmidt (1928)

小笠原諸島に於ける混血者の研究を行ひその混血人口等を調査し、又日本人と白人、黑人及びポリネシア人等の混血に就いて研究しその表徵は全く日本人的であると言ひ、ヨーロッパ人に對して優性であると發表した。又混血に於ける不姙症を化學的機構の變化により說明し、混血者に於いては性細胞周圍の媒體にイオン濃度の變化が起り、その結果、化學的作用に最も銳敏に影響を受くる性細胞は、反應として、爲に不姙を招來するものであると言つてゐる。

○Leicher (1928) (1929)

アリアン人種とユダヤ人種の混血に關して研究、三三組の混血家族一〇一人の子供を調査し、狹耳型は優性、廣耳型は劣性である事、又鼻形の凹型は凸型なるもの、直型なるものに對して劣性であり、凸型は直型なるものに對して部分的に劣性であると報告した。

○Wagenseil (1928)

小笠原諸島人の混血調査研究を行ひ、蒙古褶襞の優性なるを報じGoldschmidtと同樣なる見解を發表してゐる。

○Nilson-Ehle (1928)

混血による躍進現象は同義因子の作用であると發表してゐる。

○Steggerda (1928)

ジャマイカに於けるヨーロッパ人と黑人の混血を調査研究一四〇〇人の學童を調査し、ムラットの、身長はその中間にある事を示し、又混血人口に於ける諸識徵の多樣性表現を研究し、分離と相關の外に、中間型も存在する事を發表した。

○Gates (1928)(1929)

エスキモーとデンマーク人の混血研究を行ひ、又白人とオヂブウエ

イ人（Ojibway）及び Gree 印度人の混血に就いても調査し、印度人の皮膚色調は二或はそれ以上の數の因子によりて規定せられるものと考へ、その因子中の一つは目の色をも支配し、爲に濃調の皮膚を有する混血者は常に強度の黑色調の目を有するものであると發表し、又インディアンの顴骨の高い事は優性であつて、ポルトガル人と Tupi 印度人の混血者第一代目は中間型であると報じてゐる。

○A. Schreiner (1929)

ノルウエー人フイン族及びラップ族の混血を研究、顴弓幅、前頭幅等の顏面に關し、その躍進現象を報告してゐる。

○Hildén (1929)

スウエーデン人とフイン族の混血を研究、特に耳部に於けるダーヴィン氏耳尖に關し、遺傳研究を行つてゐる。

○Seligmanns (1930)

白人と支那人、マレー人とメラネシア人の混血に關し、モンゴロイド的眼瞼型が優性である事を報じてゐる。

○G. D. Williams (1931)

ユカタン半島でスペイン人とマヤ印度人の混血男子八八〇人、女子六九四人を調査し、混血者はスペイン人の血よりも印度人の血を多分に有し、スペイン人の有する狹鼻型、印度人の短頭にして、頭幅の大なる事は、優性の樣であると報告、又印度人の剛直毛はスペイン人の波狀型なる柔毛に對し、優性遺傳であるとし、更に黑色毛は優性で、女子より男子に顯著に働き、虹彩色も濃調なるものが優性で、これは女子に於いて强く示されたと言ひ、次の割合を掲げてある。

男子暗調又は暗褐調　八九％　綠褐乃至青褐調　七％
女子〃　八一％　〃　三％

但し本半島にては三五〇年來混血の行はれ來たものであるから、科學的なる混血度を決定する事は困難であるとしてゐる。

○E. M チエプルコブスキイ（1917—1934）

ソ聯邦のリアザン、ペナ、タンボブの政府管下の住民を「リアザン型」と稱し、ロシアの原住民は斯る「リアザン型」であるが、明にフイン族との混血があり、最もモルトバ人、モクシヤ人に近いものであると報告してゐる。

○A. J ヤルコー（1917—1934）

アルタイ地方に於ける混血種を研究し、純血種よりも多く存在してゐる事を報告、混血によりて、體質低下を來さないと言ひ、又中部アジア亞型としてのウズベック人、トルコ人、チヤウデル人等の混血者の出產率は大なるものがあると報告、更にフイン族には二つの型があつて、一つは廣顏、色黑く、ウスト・シソルスク地區に居住し、他の一つは中頭で白く、イヅホラ・ペチヨルスキイー及びウスト・ビイム地區に居住してゐるが、これは恐らく西ヨーロツパ人と混血したものの樣であると發表した。

○Schaube (1934—1935)

南米チリーに於ける印度人とヨーロツパ人、主として、地中海沿岸より移住したる、メデテラン人との混血者を調査し、人類學的計測、指紋、掌紋及び毛髮の形狀等を觀察した。又地中海人種の外にドイツ人、英國人、スカンヂナビア人等と印度人との混血も研究し、人種の持つ特徵が雜然として、寄木細工狀になり、融合しないで發現する事を指摘

し、以て此等諸識徴は個々に分離して獨立に遺傳せるものである事を示唆してゐる。

○永井　潛、鈴木　正夫、松本　洋(1935)

アイヌ人と日本人との混血者を調査研究し、握力、打叩速度、運動感覺、指頭操作、時間反應、向性指數等を比較研究し、混血者は向性指數を除く他の五種目に就いて何れも成績惡く、向性指數のみ、男子にあつては一番高く、女子は中間であつたと報告、兒童のみに關しても混血者は運動感覺のみ第一位で、他は一般に最劣等であるが、之等の差異は先天的要因の問題よりも、後天的、社會的の原因に基くものであらうと發表した。

○内村　祐之、石橋　俊實(1934—1936)

アイヌ人と日本人及び此等混血者の智能檢査を行ひ、アイヌ兒童一、一五八人(内純血七八八人、混血三七〇人)日本兒童一、三二一人を調査、自由畫テスト、クレペリン式連續加算法、ブールドン氏抹消法等を試行し、一般にアイヌ人は日本人に比べて劣り、混血者は、この中間に位する事を發表してゐる。

○J. S Huxley (1935)　A. C. Haddon. (1935)

世界に於ける諸種の混血狀態竝びにその特徴等を論じ、人種混血問題を單に、生物學的問題として、解決するよりも、國家的、社會的諸情勢に關する事柄として重要なるを說き、現今、既存人種の實態より推判して、純粹種なるものはなく、混血は强ち有害であるとは斷定し得られないと發表してゐる。

○W. Abel (1937)

南アフリカの混血種に於いて、齒列の不調和である事を報告してゐる。

又モロッコ人と白人、安南人と白人の混血を研究、概して第一代目は變異多く、前者の混血者は、毛型、鼻型、唇型、頭型等黑人的であり、後者の混血者に於いては、逆にその剛毛性、蒙古褶襞、偏平なる顏貌、小なる鼻、頭圍の圓穹狀等が顯著に表現せられたと發表、ネグリド的傾向は多分に蒙古人的遺傳體を含んでゐるが、蒙古褶襞なき細長なる目に付いては蒙古人的よりも、黑人的な眼列が優性である事を報告してゐる。

○S. L. Gulick (1937)

ハワイに於ける混血問題を論じ、人種により分類したる婚姻數を掲げ、更にその智能問題を論じ、六五人の支那人、白人及びハワイ人の混血種の調査の結果、優秀なる結果が見られたと言ひ、他の混血種は概ね中間的位置を占むるものであると發表した。

○Adams (1937)

ハワイに於ける混血調査を研究し、その社會現象、卽ち言語、宗教習慣、傳統、社會的地位、教育等を論じ、ポルトガル人と白人との差別感情あるを言ひ、一九三二年七月三十日現在に於いて、ハワイ婦人の六〇%、ポルトガル婦人の四五%、日本婦人の五%が他人種と混血してゐるのを報告、混血ハワイ人の急速な增加を示し、一九二〇年より一九三〇年の十年間に混血ハワイ人は、ハワイ人、支那人、ポルトガル人の數を凌駕したと發表してゐる。

○Eickstedt (1939)

混血一般論、又疾病原因としての混血問題を論じ、多くの混血研究結果を例證しつゝ、一般にメンデルの法則に從ふものとし、諸識徴は

多樣性を示さず中間型を示し、混血第二代目は逆に多樣性を示し諸識徴は不調和を示すに到ると言ひ、更に人種は長年の淘汰と突然變異により、その內分泌的平衡狀態の調和にあるのであるが、混血はその統一性を破壞するものであるとし、印度人と歐洲人の混血に就いて斯かる不調和と體質的障碍に關して論述してゐる。更にラップ族とスウエーデン人の混血者は精神作業力が低下する事を例證してゐる。又現在棲息する地域の遠近如何によつては、必ずしも血緣的親近關係を肯定するを得ずとして、ラップ族とポリネシア人を擧げ、生物學的に近い血緣の混血に就いては、何等價値ある證明なく、遠い血緣の混血に關する生物學的考察に對してのみ、多くの重要なる證明の存するものなるを指摘し、混血度の問題を論じてゐる。

○Härtel (1939)

歐洲人と日本人の混血に關し、その不調和性と體質的障碍性に就いて報告す。

○Tao (1939)

支那人とドイツ人の混血家族を調査研究し一三組の夫婦と、その子供を研究、何れも一二歲以下のもの二〇人を調査せり。卽ち皮膚の黃調なるものは白人の淡調なるものに對して、優性のものの樣で、小兒ではヨーロッパ人の白調が相當認められたと言ひ、蒙古斑は三一％に認められ、この消失は支那人の小兒よりも、多少早期に起ると論述し、毛髮は中間型にして、多少暗調のものが多く、硬軟性に關しては、八八％は父側の剛毛乃至柔毛であるが、年齡と共に硬化する現象を認め、剛毛は柔毛に對して優性らしく、概して、毛髮は父よりも細いと言ふ。毛髮の太さは中間型で、目は黑色調のものが優性であり、位置は傾斜せるものが、然らざるものに對して不完全優性で、身長、頭型、顏貌は不定であるが、鼻形はヨーロッパ人に特有なる凸型のもの、低い東洋人の鼻形に對して優性のものの樣であると言ひ、混血者は何れも高い鼻型を有してゐたと報告してゐる。更に蒙古褶襞は第一代目には全部發現し、第二代目以下は二五％に示されたと言ひ、支那人の蒙古褶襞は白人に對して優性である事を報告してゐる。

○谷口　虎年(1939)

アイヌ人と日本人、及び南洋群島のチャムロ族、卽ちスペイン人とカナカ土人の混血と稱せらるゝものを若干調査、又日本人と朝鮮人の混血に就いても調査してゐる。

○石原　房雄、佐藤一二三(1941)

日本人と中華人の混血家族を調査研究し、卽ち男は中華民國人、女は日本人なる混血夫婦、六四家族にして、此等混血兒童二〇四人に就き醫學的調査を行つてゐる。卽ち身長四—五歲の子供では、日本兒童と差がないが、七—一三歲に及んで、六—七粍、混血者は高く、ローラー指數は乙位のもの男女平均六六％で、大差なく、比胸圍は若干細長型を示した。又學業成績は概して良好で、他の諸遺傳識徴は中間型を示してゐると報告した。

○水島　治夫、三宅　勝雄(1941)(1942)

第五回人口問題全國協議會に於いて、日本人と朝鮮人の混血者に關して報告した。卽ち父を朝鮮人とし母を日本人とする混血兒童をA群とし、男一六〇人、女一四五人、父が日本人にて母が朝鮮人なる混血兒童をB群として、男八二人、女六二人を朝鮮にて調査研究し、父を朝鮮人、母を日本人とせる混血兒童男一六人、女一七人を內地に於いて

調査研究し之をC群としてゐる。而してB群はA群より身長一般に大で、胸圍はAB兩群大差ないが、內地在住の混血者は著しく胸圍狹く、體重はB群最も優れ、純日本兒童と比較すると一般に混血者は身長、體重、胸圍とも優れてゐると報じ例外として高學年(一三歲頃)の體格は大都市日本兒童の身長及び高地農村兒童の胸圍等より劣り、純朝鮮人に比すれば混血群なるものは全年齡に亘り優れてゐる事を言ひ、又學業成績に關しては次の數値を示してゐる。

A群　優(一七・八%)　中(七五・六%)　劣(六・六%)

B群　優(一二・一%)　中(七一・八%)　劣(一六・一%)

卽ちB群の劣つてゐるものが稍〻多い事を報告してゐる。更に水島氏は「日本民族の構成と混血問題」と題して世界の混血現象を概說し、混血有害說を排擊し、更に日本民族が雜種混血によつて生じたるものである事を述べ、將來發生す可き混血兒對策の問題を論じてゐる。

○Rita Hauschild(1941)

南米の Trinidad 島及びヴェネツェラに於いて混血家族を調査研究、支那人と黑人の混血家族七組、四十二人を調査、又、支那人とインディアンの混血家族二組十四人を調査してゐる。調査項目は、毛髮、皮膚、眼、頭形、顏輪廓、眼型、鼻、唇、上下唇被膜、顎、耳部(子供丈)、體軀の釣合、全體の印象等の觀察事項を主として行つてゐるもので現今までの混血調査に關する結果を判別檢討しつゝ、特に毛髮に於いては複對因子、同義因子の導入を主張し、皮膚の色調に於いては日光照射の影響及び頰の赤味(Wangenrot)、雀斑(そばかす)(Sommersprossen)等を述べ、蒙古褶襞に關しては、本混血者に於いては優劣、決定的でなく、更に Plica-Naso-Marginalis に關して特に注意してゐる。

鼻型は凹型なるものの遺傳を說明し、上下唇被膜では突唇なるものが劣性の樣であると報告してゐる。頭型については複雜で單に量、長さ、幅、指數等で示される程簡單でなくその生長度を說き、一般に躍進現象あるを認めてゐるが、體軀全體の釣合並びに狀態は、ほつそりとした弱化現象を呈してゐると言ふ。概して本調査は遺傳學的に研究せられてゐるもので、その結論は不安定であるが更により多くの識徵に關して發生學的に調査する事が必要であると發表してゐるものである。

○松岡　壽八(1942)

雜婚問題對策として極端な兩人種の混血は避く可きであるが、近緣なるものは有害ではないとして、グレゴリー、イースト・ジョンス・ハンキンス等の意見を引例し、民族發展上の日本に於いて、斯かる混血の行はれ事は適當であるとして、これが對策として、日本婦人の奮發を促し、以てこれが第二世の養育宜しきを得る事を希望し、意見を發表してゐる。

○篠崎　信男(1943)

南洋群島に於いて、イギリス人、ドイツ人、スペイン人、ポルトガル人、アメリカ人等の歐洲人と各島のカナカ土人との諸種の混血種を家系的に調査、凡そ六家系、一五七人を調査研究し、毛髮、皮膚、眼、顏面、鼻、唇、耳等を觀察し、指紋、掌紋、血液型その他人類學的諸計測を行ひ、その概略を發表し、結論として、ヨーロッパ人的色彩の失はれつゝある事を報じ、混血の脫化現象、複對因子、同義因子の研究、並びに左右不相稱、生長學的遺傳研究の不可缺を說き、その他混血研究はそれ等の變動性を遺傳並びに環境、特に社會的、又民族意識問題

等、綜合的且科學的に研究す可きである事を發表してゐる。

以上は混血に關する研究、竝びに報告に就いて、その概略を摘述したものである。

通覽するに、生物學的研究が多く、人類遺傳學に資するものが少くないのである。

而して、これが研究は各國に於いて、夫々異る目的の下に進められつゝあるのは當然であるが、此等研究結果の及ぼす處、廣くは人種識微の決定、人種衛生の問題、民族政策の資料となる可く、民族の研究には不可缺の要素たるを失はぬのである。更に世界各地に於いて、混血種と稱せられるもの少くなく、特に未開僻地に於ける小住民に多く見出されるものである。

卽ちビルマのドアニヤ族はカチン人とアホム人の混血、泰國南部西海岸のサムサム族はシヤム人とマレイ人の混血、小スンダ列島のウオンマヂヤパヒトはバリ人とジヤバ人及び印度よりの移住者との混血、ボルネオのクイジヤウ族はヅスン人とムルト人の混血、フイリピンのアタ人はビコル人とアエタ人の混血、又ミンダナオ島のカリブガン族はサマル、ヤカン、スバノン等の混血、ルソン島のバルガ族はマライ人とアエタ族の混血種等々を擧げ得るものである。

上述せる處は單に生物學的問題のみに止らず廣汎なる民族問題に資す可きものと考へ、此處に通論したるものである。

參考文獻

○遺傳學　田中義麿

○人種學概論　小山榮三

○亞米利加土人の混血　松村瞭
人類學雜誌　第33卷　87頁

○小笠原島の混血兒調査抄報
人類學雜誌　第43卷　423頁

○歸化人種の區別　加茂元喜
人類學雜誌　第4卷　322頁

○黑人と白人の雜婚　松村瞭
人類學雜誌　第28卷　356頁

○雜婚　坪井正五郎
人類學雜誌　第24卷　55頁

○雜婚と性抄報　人類學雜誌　第24卷　176頁

○人種混淆の研究
Hooton著　須田昭義抄譯
人類學雜誌　第42卷　362頁

○臺灣蕃族と本島人の雜婚
森丑之助
人類學雜誌　第29卷　245頁

○北極圈內の諸民族　小山榮三
民族學研究　第1卷

○ソビエトロシア過去17年間の人類學界
B. N. ビシネフスキイ　今村豐譯
民族學研究　第3卷

○遺傳、體質、混血　谷口虎年

○民族生物學　古屋芳雄

○民族と混血　古屋芳雄　日本醫事新報

○日本民族の構成と混血問題
水島治夫

○アイヌ學童と知能檢査——知能の人種的差異並びに知能に及す混血の影響に關する一知見——
內村祐之　石橋俊實
民族衞生　第20卷　第4號

○日華混血兒の醫學的調査
石原房雄　佐藤一三
民族衞生　第9卷　第3號

○內鮮混血問題について
水島治夫　三宅勝雄
第五回人口問題全國協議會報告

○アイヌと和人の混血兒に關する調査
永井潛　鈴木正夫　松本洋
民族衞生學會第4回學術大會發表

○大東亞民族問題　松岡壽八

○東亞民族名彙　帝國學士院

○日本人と南洋人　長谷部言人　日本民族別刷

○ナチス民族人口政策摘要　人口問題研究所

○南洋群島人と歐羅巴人其他との混血家系調査豫報
篠崎信男
人類學雜誌　第58卷　第5號

○Bean. (1911), Heredity of hair form among the Filipinos. Amer. Natural., Vol. 45.

○Boas, H. M. (1919), Inheritance of eye-color in man. Amer. Journ. Anthrop., Vol. II.

○Davenpart, Ch. (1917). Heredity in Stature. Eugenic record.

——— (1925), Skin Colour. Carn. Inst. Wash., Nr. 188.

——— (1925), Body build: its development and inheritance. Eug. Record Off. Bull., Nr. 24.

——— (1925a), Notes on physical Anthropology of Australian aborigines and black white hybrids. Amer. Journ. phys. Anthr., Vol. 8.

——— (1926), Human metamorphosis. Amer. Journ. phys. Anthr., Vol. 9.

——— (1927), Race crossing in Man. C. R. III Sess. Inst. internat. d'Anthr. Amsterdam.

——— (1928), Nasal breadth in Negro and white crossing. Eug. News. Vol. 13, No. 3.

——— (1928a), Is there inheritance of twinning tendency from the father's side? Verh. 5. internat. Kongr. Vererbg., Bd. 1. Berlin 1927.

○Fischer, E. (1913), Die Rehobother Bastards und das Bastardierungs problem beim Menschen. Jena, 1913.

——— (1914), Die Rassenmerkmale des Menschen als Domestikationsmerkmale. Zeitschr. Morph. Anthr., Bd. 18.

——— (1929), Zur Frage einer äthiopischen Rasse. Zeitschr. Morph. Anthr., Bd. 27.

——— (1930). Europäer-polynesier-Kreuzung. Zeitschr. Morph. Anthr., Bd. 28.

——— (1930), Versuch einer Genanalyse des Menschen. Zeitschr. induk Abstam- u. Vererblehre. Bd. 54.

——— (1924), Schädelform und Vererbung. Zeitschr. f. indukt. Abst.- u. Vererbgl., Bd. 33 und Münch. med. Wochenschr. 1923, Nr. 50.

——— (1924), Zum Konstitutionsbegriff. (Autoreferat.) Klin. Wochenschr., Jahrg. 3, S. 299.

——— (1938), Neue Rehobother Bastardstudien. Zeitschr. f. Morph. u. Anthrop. Bd. 1.

○Hagen, B. (1906), Kopf- und Geschichtstypen ostasiatischer und melanesischer Völker. Stuttgart.

○Jenks, A. (1916), Indian-White amalgamation. Studies in Soc. Sc. Univ. of Minnesota, No. 6.

○Meyer, H. (1917), Zur Biologie der Zwillinge. Zeitschr. Geb. Gyn., Bd. 79.

○Neuhaus, R. (1885), Verhandlungen S. 30. Zeitschr. Ethnol., Bd. 17.

○Salaman. (1911), Heredity of the Jew. Journ. of Gen. Vol. 1.

○Virchow, H. (1912), Die Stellung der Haare im Brauenkopf. Zeitschr. Ethnol., Bd. 44.

——— (1924), Zur Anthropologie der Nase. Ebenda, Bd. 56.

○Baur-Fischer-Lenz. (1927), Menschliche Erblichkeitslehre und Rassenhygiene, (3. Aufl.). München.

○Bernstein, F. (1923), Zur Statistik der sekundären Geschlechtsmerkmale beim Menschen. Göttinger Nachr., Math.-phys. Kl.

——— (1928), Über mendelistische Anthropologie. Verhandl. 5. internat. Kongr. Vererbg. Berlin, 1927. Bd. 1.

○Fehlinger, H. (1926), Geschlechtsleben und Fortpflanzung der Eskimo. Abhandl. aus d. Geb. der Sexualforsch., Bd. 4, Heft 6.

○Frets, G. P. (1927), Die Auffassungen M. W. Hauschilds über die Erblichkeit der Kopfform. Zeitschr. Morph. Anthr., Bd. 26.

○Frey, Hedwig. (1924), Konstitution und Morphologie. Schweiz. Med. W., Nr. 36.

○Eickstedt, V. (1926), Eine Studie über menschliche Körperproportionen und die Ursachen ihrer Variabilität. Mitt. Anthr. Ges. Wien., Bd. 56.

○Friedenthal. (1915), Ergebnisse und Probleme der Haarforschung. Zeitschr. f. Ethnol. Jahrg. 47.

——— (1926), Zur Grundlegung des Rasseproblems in der Anthropologie. Haustierrassen, Menschenrassen und Menschenaffen. Zeitschr. Ethn., Jahrg. Heft 1—2.

○Gates, R. R. (1925), Mendelian heredity and racial differences. Journ. R. Anthr. Inst., Vol. 55.

——— (1928), A pedigree study of Amerindian crosses in Canada. Journ. R. Anthr. Inst., Vol. 58.

——— (1923), Heredity und Eugenics.

○Geyer, E. (1928), Vererbungsstudien am menschlichen Ohr. Mitt. Anthr. Ges. Wien, Bd. 58.

——— (1928), Vererbung der bandförmigen Helix. Mitt. Anthr. Ges. Wien., Bd. 58.

○Dunn, L. (1923). Some results of race Mixture in Hawai. Eug. in race and state. Baltimore.

——— (1928). An anthropometric study of Hawaiians of pure and mixed blood. Pap. Peabody Mus., Vol. II, No. 3.

○Goldschmidt, R. (1927). Neu Japan. Berlin.

——— (1928). Die Nachkommen der alten Siedler auf den Boninsinseln. Mitt. Deutsch. Ges. f. Natur- U. Völkerkunde Ostasiens., Bd. 22, Teil B.

○Mjöen, J. A. (1921), Harmonische und unharmonische Kreuzungen. Zeitschr. Ethnol. Bd. 52.

——— (1925), Zur Erbanlage der Begabung. Hereditas, Bd. 7.

——— (1926), Biological consequences of race crossing.
Journ. of Hered., Vol. 17, Nr. 5.

——— (1927), Rassenmischung beim Menschen.
C. R. III. Sess. Inst. internat. d'Anthr. Amsterdam.

——— (1929), Rassenkreuzung beim Menschen.
Volk und Rasse 1929, H. 2.

○Harris, R. G. (1926), The San Blas indians.
Am. Journ. phys. Anthr., Vol. 9, No. 1.

○Henckel, K. O. (1926), Über Konstitution und Rasse.
Zeitschr. Konst., Bd. 12, Heft 2.

○Herskovits, M. (1924), On the negro-white Population of New York City: The use of the variability of family strains as an index of heterogeneity or homogeneity.
C. R. 21. Congr. internat. des Americanistes Sess. La Haye.

——— (1925), A further discussion of the variability of family strains in the Negro-white population of New York City.
Journ. Amer. Statist. Assoc.

——— (1926), Some effects of social selection on the American negro.
Publ. Amer. Social. Soc., Vol. 32.

——— (1930), The Anthroponetry of the American Negro.
Columb. Univ. Contr. Anthrop. LXI.

——— (1927), Variability and racial mixture.
Amer. Natural., Vol. 61.

○Hildén, K. (1922), Über die Form des Ohrläppchens beim Menschen und ihre Abhängigkeit von Erbanlagen.
Hereditas III.

——— (1925), Zur Kenntnis der menschlichen Kopfform in genetischer Hinsicht. Hereditas VI.

——— (1929), Studien über das Vorkommen der Darwinschen Ohrspitze in der Bevölkerung Finnlands.
Fennia 52, Nr. 4.

○Hooton, E. A. (1923), Observations and querries as to the effect of race mixture on certain physical characteristics.
Eug. in race and state. Baltimore.

——— (1926), Methods of Racial Analysis.
Science, LXIII.

○Hrdlicka, A. (1928), Catalogue of human crania in the U. S. Nat. Mus. Coll. in Proc. U. S. Nat. Mus., Vol. 71, Art. 24.

○Just, G. (1925), Zur Vererbung der Farbensinnstufen beim Menschen.
Arch. Augenheilk., Bd. 96. Heft 3/4.

○Karvé, J. (1930), Augenfarbe der Chitpavans.
Zeitschr. Morph. Anthr., Bd. 28.

○Keith, A. (1928), The evolution of the human races. (Huxley Mem. Lect.)
Journ. R. Anthr. Inst., Vol. 58.

○Schlaginhaufen, (1922), Über menschliche Haarformen. Verhandl.
Schweiz. Nat. Ges. II.

○Schreiner, A. (1924), Anthropologische Studien an norwegischen Frauen.
Vidensk. Skrift. I. Mat-Nat. Kl., Nr. 9.

——— (1929), Die Nordnorweger.
Skrifter N. Vidensk. Akad. Oslo Mat-Nat. Kl., Nr. 2.

○Semenowski. (1927), The distribution of the principal types of epidermic patterns on the fingers of the man.
Journ. russ Anthr. T. 16.

○Siemens, W. (1924), Zur Kenntnis der Epheliden mit Bemerkungen über Haarbleichung und Haarfarbenbestimmung.
Arch. Derm. Syph., Bd. 147.

——— (1927), Das Problem der Erbgleichheit bei den eineiigen Zwillingen.
Virch. Arch., Bd. 264. Heft 2.

○Snyder, L. H. (1926), The linkage relations of the blood groups.
Anat. Record, Bd. 34.

○Steggerda, M. (1928), Physical development of negro-white hybrids in Jamaica.
British west Indies.
Amer. Journ. Phys. Anthr., Vol. 12, Nr. 1.

○Suk, V. (1928), Congenital pigment spots in Eskimo children. Anthr. (prag). Bd. VI, H. I.

○Bernstein and Robertson. (1927), Racial and sexual differences in hair weight. Am. Jour. Phys. Anthr. 10.

○Bijlmer, H. J. T. (1929), Outlines of the anthropology of the Timor-archipelago. (Ind. Com. Voor Wetensch. Onderzoek. III) Weltevreden.

○Boas, F. (1895), Zur Anthropologie der Nordamerikanischen Indianer. Zeitschr. Ethno. Bd. 27.

——— (1922), Report on the anthropometric investigation of the population of the United States. Journ. Amer. Statist. Assoc.

——— (1928), Materials for Study of Inheritance in Man. Columb. Univ. Contr. Anthrop VI.

——— (1940), Race Language and Culture.

○Lundborg, H. (1921), Die Rassenmischung als Ursache zu auffälligen Morphologischen Veränderungen im Gesichtstypus. Upsala Läkareför. förhandl. N. F. Bd. 26.

——— (1921), Hereditas. Bd. 2.

○Salmon, T. N. and Blakeslee, A. F. (1935), Genetics of sensory thresholds: variations within single individuals in taste sensitivity for P. T. C. Proc. Nat. Acad. Sci. 21.

○Bunak, V. V. und Sobolewa, G. V. (1925), Untersuchung der Elemente der Irisfärbung beim Menschen. Exper. Biol. Serie. A.

○Buschke. (1925), Haarwuchsform bei einem Mischling. Ebenda, Bd. 17.

○Mac Canghey. (1919), Race mixture in Hawaii. Journ. Hered. 10.

○Carrière. (1921), Über erbliche Ohrformen, insbesondere das angewachsene Ohrläppchen. Zeitschr. f. ind. Abst.-u. Vererbl., Bd. 28.

○Carter, J. G. (1928). Reduction of variability in an inbred population. Am. Journ. Phys. Anth. Vol. II, No. 3.

○Castle, W. E. (1926), Biological and social consequences of race-crossing. Am. Journ. Phys. Anthr., Vol. 9, Nr. 2.

○Chervin. (1908), Anthropologie bolivienne. Paris.

○Dahlberg, G. (1926), Twin births and twins from a hereditary point of view. Stockholm.

○Danforth, C. H. (1921), Distribution of hair on the digits in man. Am. Journ. Phys. Anthr., Vol. 4, No. 2.

——— (1924), The theoretical distribution of hereditary traits in Man. Am. Journ. Phys. Anthr., Vol. 7, No. 3.

○Darré, W. (1929), Das Bauerntum als Lebensquell der Nordischen Rasse. München.

○Rodenwaldt, E. (1927), Die Mestizen auf Kisar. Batavia.

——— (1939), Rasse und Umwelt. Organimen, u. Umwelt, S. 19.

○Wieth-Kundsen, K. A. (1938), Croisement de races et fecondite. Natalité et progres.

○Encyclopaedia Britannica. (1939), The British Empire: Area and Population.

○Trevor, J. C. (1938), Characteristics of Hybrid Population. Eugenic. Review. XXX.

○Muller, H. J. (1936), On the variability of Mixed Races. Amer. Nat., LXX.

○Shapiro, H. L. (1931), The Chinese Population in Hawaii. The American Council. Institute of Pacific Relations.

○Wagner, K. (1932), The Variability of Hybrid Population. Amer. Journ. Phys. Anthrop. XVI.

○Abel, W. (1936—1937), Über Europäer-Marokkaner und Europäer—Annamiten Kreuzung. Zeitschr. f. Morph. Anthr.

○Tao, Yun-kuei. (1935), Über Chinesen-Europäerinnen Kreuzung. Zeitschr. f. Morph. u. Anthrop.

○Geipel, G. (1933), Ein Winkel fur den Stellungswinkel des menschliche Chres. Zeitschr. f. Morph. u. Anthr.

○Krieger, H. (1940), Die Rassenfrage in Brasilien. Archiv. Rassen. u. Ges.-Biologie. Bd. 34, H. 1.

○Huxley, S. und Haddon, C. (1935), We Europeans: A Survey of Racial Problem.

○Walker, E. A. (1940), South Africa. Oxford. Pamphlets on world Affairs.

○Little, K. L. (1941), The Study of Racial Mixture in the British commonwealth. Eugenic. Review. XXXII.

○Hauschild, R. (1941), Bastardstudien an Chinesen-Neger Kreuzung in Trinidad und an Chinesen-Indianer Kreuzung in Venezuela. Zeitschr. f. Morph. u. Anthrop.